

## ヘルマン・ノールにおける青年の問題

菊池龍三郎

「二・三週間前、新聞で青少年指導者を大いに考えこませてしまふにちがいない事件を知った。ケベニク市の三人の青年が、ソヴィエト政權誕生十周年記念日に自殺したのである。その政党の催しに参加した後である。彼らは友人の一人の家に行き、母親の入れてくれたコーヒーを飲み、しばらく遊んでからそのあと突然つぎつぎにピストル自殺をしたのである。新聞は『謎の自殺』という見出しで報じている。三人のうち一人は、怪我をしただけであったが、病院に運ばれてからも、かれは何度も自殺しようとした。自殺の理由についてはかれからは何も聞き出せなかった。すべてが謎に包まれていた。自殺にあるはずの動機というものがさっぱりわからなかったことによるからである。しかしそれがどのように理由づけられようと、究極的な理由は明らかに、日常生活(Alltag)に対するこれらの青年の幻滅であり、深い悲哀に満ちた絶望である。こうした絶望がまさに政治的な記念日に爆発したということは、三人がかれらの政党の奉ずるイデオロギーに対して信仰を失っていたことを推測させる。これと同じ出来事がそれも同じ日にツヴィカウ市で起った。三

人の青年労働者が、ソヴィエト政權を祝う炬火行列のあとで自殺していることを考えると、このような動機があるのではないかと想像される。しかし、とは言え、その背後にあるのは、これら青年たちにとって、かれらを熱中させる信仰の対象がないとかれらはもはや現実の中に意義ある何物も見出せないという事実であり、またかれらがこうした日常生活を怖れていることであり、他の何千何万という青年たちのだれもがするように、映画や酒や女の子といった共通の享樂に酔い痴れるには考えていることが余りにも高すぎるという事実である。(1)これは、一九二七年十二月一日にベルリンで開催された青年指導(Jugendföhrer)、青年運動の指導者集会でのヘルマン・ノール(H. Nohl, 1879 - 1960)による「青年と日常生活」(Jugend u. Alltag)と題する講演の冒頭の部分である。のっけからこのいささか冗長な引用したのは他でもない。一般に、青年の行動の諸相は、学校教育の問題としてよりも、何よりも先ず、青年教育の問題として考察されるべきであろうと考えるからである。イデオロギーへの懷疑、実生活及び労働への逡巡、脱生活性(Auss

eralltäglichen)、信仰への絶望と自殺等々この引用に現われた青年の行動の諸相は、かつてシュプランガーが「あこがれが青春の総括概念である」と定義したロマン主義的な青年像だけでは説明しきれない新しく異質な問題の発生を思わせる。ところで本稿は、いわゆる世代論や青年論の展開を企図するものではない。ノールが二十年代における青年の問題をどういった構図のもとで把握し、さらに青年の問題を教育学の問題とどのように交錯させているかを明らかにしようとするものである。その具体的な手がかりとして今世紀初頭のドイツ青年運動の果たした役割をめぐるノールの見解を中心に取扱うことにする。青年運動を取上げる理由としては、第一に一般的な理由としては、青年の社会的成熟の諸相は、その時代時代の青年運動の諸系譜に間接的に反映され、同時に、その時代時代の支配的な青年運動の特質は、同時代に生きる青年たちの社会的成熟過程に対して一定の積極的な影響を及ぼしていくからである。(2)第二に、ノールの場合についてのみいいうなら、ドイツ教育改革運動の唯一人の「体系的理論家」とされるかれにとって、青年運動は機を同じくして展開した諸々の教育改革運動の「精神的酵母」であり、ヘルンギーであり、かれ自身の教育理論の出発点でもあったからである。そこで本稿では、以下の三点を吟味した。

(一) 青年運動が青年指導に与えた影響と限界は何か。またそれとの関連でノールは青年指導者(Jugendfleger)にどのような

新たな課題を期待しているか。

(二) 青年運動が教育学に与えた影響と青年教育学の限界をノールはどのように見ているか。

(三) 青年運動の限界をノールはどのように認識していたのか。

はじめに、この講演記録のノール教育学著作中に占める位置について少しく述べておきたい。ノールの陶冶論の基本には「基礎的精神性」(Die elementare Geistigkeit) という考え方があつた。それはドイツ理想主義の人文主義的陶冶理想の系譜に属するものであるが、ノールの関心は人間の中に被包されたロマン主義的な色彩を持つ基礎的精神性をどのように発現させ完成させるかの問題に寄せられる。かれ自身は、ドイツ理想主義の陶冶理想に基本的には同調しつつも、同時に、それが陶冶概念から基礎的精神性の発現契機としての「日常生活」(Alltag) を排除していることを批判する。ところでノール自身「日常生活」というものをどう認識していたのだろうか。主として以下の論文では日常生活は小市民的で牧歌的な小景(kleinbürgerlich Idylle) としてとらえられている。Die zweite achte deutsche Geistigkeit u. ihre pädagogische Bedeutung (1932) Die idyllisch Seele Flanderns (1916) Die volkrezerische Arbeit innerhalb der pädagogischen Bewegung (1932) Landbewegung, Osthilfe u. die Aufgabe der Pädagogik (1933)。<sup>6)</sup>これに対し、先の講演記録を含めた「日常生活

活」に関する三部作「青年と日常生活」(Die Jugend u. der Alltag, 1927)「学校と日常生活」(Schule u. Alltag, 1929)「陶冶と日常生活」(Bildung u. Alltag, 1929)では「同時に「荒涼たる、個人では克服しがたい工業化時代に生きる人間の日常生活」としてもとらえられている。「日常生活」概念のこの両義性は、以下の戦後の論文では三部作よりも強くあらわれている。Die Erziehung in der Kulturkrise (1948) Die geistige Lage im gegenwärtigen Deutschland (1947) Goethes Lebensform en (1948) Die geistige Lage des akademischen Nachwuchses (1946)

## 一、青年と日常生活の問題

### 1. 青年指導と青年運動

冒頭の引用に戻るなら、そこに現われた青年の行動の諸相を、ノールは「青年指導が念頭におかねばならない現実」であるとす。そもそも「青年」とは何であるのか。「青年の持つ高次の生活への期待、つまり健全な若者なら誰れもが抱く将来への大きな期待やロビンソンクルーソー風の体験小説や英雄小説と外の世界がかれらに要求する日常生活との間の危険な対立は、青年の根本経験なのである。」(3)ヘーゲルもその独自の青年の性格学の中で、青年期に生ずる

「憂鬱病」を「それは多くの人においては余り目立たないかもしれないが、誰れしもそこから容易には脱け出せないもの」と特色づけられている。(4)問題は青年の社会的成熟過程におけるかれらのロマン主義的な憧憬や期待とかれらを外で待ち受ける現実の日常生活との間の関係の様態である。憧憬と現実生活との間に一定の連続性が予想されるならば、つまり現実生活が青年の憧憬や内的衝迫を歪めることなく十分に成熟させるものであるならばともかく、かかる小市民的牧歌的小景としての日常生活は現実には存在しないのである。またそここそ、資本主義社会における社会的に無能な青年の問題の現実性があるといえよう。ノールにいわせれば、青年の「根本経験」は「今日、大都市の現実、とくに住宅事情の悪さとそこに起因するあらゆる争いと汚れ、失業、あるいはまた精神的形式や善い習慣もなしに若い人々を刑務所と同様、その生産機構の中に退屈かつ無感動に縛りつけ、かれらに何らの自立性も与えず労働者階級の劣等感を背負わせている職業というものによって、とてつもなく悪化している」とされる。(5)根本経験の悪化が、「基礎的精神性」の発現と成熟を抑止あるいは歪曲しているということ、これが青年指導が直視せねばならない現実なのである。

青年指導は青年たちのこうした状況に対してどういう防衛策を講じ、日常生活に関しては青年をどのように助けるべきなのか。青年指導は、その第一期においては、これを宗教的・道徳的な教化によつ

て解決しようとした。また第二期においては、青年運動と関係しながらこれに対処しようとした。青年運動が青年指導に成した貢献は、「余暇の精神化」であった。余暇を支配するのは「完全な自由意志」であり、そこでは誰れもが自己の最高のエネルギーを発揮することができる。ハルダーネ卿はノールに「将来の問題は余暇の正しい指導であり、そこに革命に対する唯一の効果的な手段がある」とさえ言っていた。余暇の中でみ毎日の労働で損われているものを補い発展させることができる。そこで多くの青年団体が「地下の、労働による自己の感覚の鈍麻の日々と、まさに余暇が与えてくれる太陽の日々のこの二重の日々」について語った。ここにできるだけ多くの余暇時間を勝ち取ること——労働時間の短縮と充分な休暇によって——と、そこで得た余暇時間を「精神化」することを助けること、これが第二期の青年指導の課題であった。しかし今やこの段階は終ってしまった。それは決してこの考え方がその正当性を失ってしまったということではない。むしろ反対に、特に雇用者の意識には未だ十分に浸透していない。かれらが余暇の要求の中に見るのは、青年たちの自己の健全な発達への権利ではなくて、労働組合の闘争目標だけである。そして相変らずあるのは、絶望的な青年大衆であり、かれらは未だ真実の生活というものに触れたことがないのである。(6)

このようにノールは、青年指導に対する青年運動の一定の積極的

な役割を評価しつつも、同時に青年運動の「生産的な意義」が今日すでに尽きてしまっていることを指摘する。それは青年運動の中に一定の限界が内在していたことによる。ノールはそれを「日常生活の前での停止」(Haltsachen vor dem Alltag)と定式化している。(7)生活からの逃避は青年運動の本質であり、同時に限界でもあった。ノールの青年運動観とその総括的評価については後述するので、ここでは詳述することを避けるが、要するに青年運動は「青年と社会」の二元論を前提としており、そこに「日常生活の背後に身を置こうとし、世の中への移行を一層困難にする孤立した青年生活のみを発展させようとする拒否的経験を目指す」という限界が内在していた。(8)ブルジョア青年運動はこの二元論を解消できなかったが、それがまた青年たちの思想や行動の実相でもあった。青年の生活からの逃避は青年期特有のものとなされ、無条件に許容されてきたのと同じく、青年運動も「状況の変革が必要とされるとき、ロマン主義的な(逃避の——筆者)道を歩もうとした」からである。(9)こうした青年運動の限界をいち早く見て取ったのがカソリック教会と社会主義であった。しかしノールによれば、ここでも青年はブルジョア青年運動と類似した態度にとどまっていた。というのは、社会主義にも独自の「社会的・小市民的<sup>ソシエタル・ブルジョワ</sup>生活に対する未来社会」の二元論が存在するからである。そしてプロレタリア青年が社会主義社会、労働組合、政党に奉仕する労働によって何故に生きがいを見

出すかという点、そこには雇用者のための気の進まない労働と並んで、青年が自主的に高次の生活を実現するための「第二の労働日」があると感じられるからである。しかしそこでも、遅かれ早かれ、「イデオロギーと日常生活」の間の分裂が生じ、その結果として「社会主義者たちが他の人々よりもより良いわけではない」という失望を味わうことになる。(10)そこに冒頭の引用に見られるような青年の行動が生じる。たしかにフィッシャーによれば、すでに一九二一年から二三年の間に革命の波は退潮していた。資本主義が強固になり、それに続く数年間に政治的関心は多くの若い労働者から消え去っていった。かれはG・デーンの「プロレタリアの青少年」の中の次のような報告を紹介している。「君たちは何に関心を持っていますか」というわたしの問いに対して、いつも真先に得られた答えは『スポーツ』だった。次に『ぼくらの職業、または専門技術の問題』が来て、それからやっと『政治』があげられた。プロレタリアの青少年はまずまず信仰を持たなくなり、また政治的信条も僅かの例外を除いてかれらにはなくなった。……しかしそれにしてももちろん、万事につけ政治的に全く無関心なもの数は異常なまでに多い。全く自分の私的なことしか考えない青年男女が非常に沢山いる。」(11)むろんこれが当時の青年の思想や行動の諸相のすべてを言い尽くしているわけではないにせよ、少なくとも雰囲気だけは伝えている。

結局、ブルジョア青年運動だけでなくプロレタリア青年運動も含めた青年運動全体の行き詰まりは、同時に青年たちの現実への挫折であり、反対に青年たちの現実変革の意欲喪失は、そのまま青年運動のエネルギーの消失に結びつく。一方には政治的関心を失なった青年たちがあり、かと言ってかれらは現実への退路も断たれている。また一方には政治に全く無関心な大多数の青年がいる。かれらの関心は「スポーツ」や「自分の職業・専門技術」でほとんど占められている。しかしそれともかれらが専ら個人的世界に関心を閉ざしているためであって、やはりそれも一種の逃避であり、現実の総体を積極的に評価したうえでのことではあるまい。

それでは、現実には、信仰に、政治的信条に希望を失った青年たちに対して、また現実から自己の関心を遮断してしまっている青年たちに対して、ノールは、青年指導がどういった役割を果すことを期待し、加えて青年指導者の要件としてどのような新たな認識を求めているのだろうか。

## 2. 青年指導の役割

ノールは青年指導の課題を次のように見ている。すなわち「被包され」(Abkapselung)「孤島のような存在」(Insel-Dasein)である青年たちに、ロマンチックな空想やニヒリズムの世界への逃避ではなく、日常の生活現実へと転回させること、自分に与えられている課題を直視しつつ生きていけるような「精神的な形式」を創

り出してやること、である。しかし、自分が直面する現実の中に新しい価値が見出せないとしたなら、青年は再び現実への転回を拒否することであろう。したがってかれは、青年の現実への転回には、青年自身による現実の再評価が対応していなければならないとする。一つには、青年運動に内在していた「文明―文化」という図式の廃棄が必要である。このことについてのノールの認識はここでは必ずしも明快ではない。青年運動は文明―文化の対立を基軸にして、「都市化・機械化」を文明の系列に布置し、人間的な価値は全て文化の系列に吸収することによって文明を人間の究極的な疎外要因とした。ノールの場合にもこのことは例外ではなく、本稿のまえがきのところで挙げた多くの論文のうち、「小市民的・牧歌的生活」概念を顕著に宿している諸論文ではこれと同じ傾向がはっきりと見て取れる。しかし本稿で取り上げている「青年と日常生活」をはじめとする三部作では、この図式に多少の修正が加えられ、都市化・機械化を否定しがたい現実として受容しようとする立場の変化が見られる。

さてノールは、文明というものの再評価が青年運動の側で行なわれた例として青年運動に参加した団体の一つ「義勇団」(Freischar, 一九二七年結成、ワンダーフォーゲルや開拓者 (Pfadfinder, ポーイスカウトのこと)の連合体)の決議を引用している。「われわれは『機械的なもの』、アメリカ的なものを」をわれわれの生活の生き

た一部(全部ではない)として、それを積極的な価値として感じている。……われわれはものごとを肯定しなくてはならないが、その理由はものごとの独自の法則性と、その中にわれわれが組み込まれていることを否定できないからである。」(12)かかる近代合理主義の再評価は青年運動に限らず、社会主義の側でも行なわれる。ノールは社会主義者であるデ・マンの次のような言を引用している。「ここで(近代合理主義の―筆者)否定的な側面だけを見ることは間違いである。合理主義による機械化と解体は単なる崩壊現象ではなく、恐らくはより高次の共同体文化への過渡的現象なのだ。」(13)むしろここで見る限りでは、青年運動も社会主義も文明―文化の対立図式を等しく高次の共同体文化へ止揚しようと考えている点では、その志向は同じであるように思われるが、その共同体文化の内実については異なる。ノールにおいてはこのことは明確に認識されてはいないが、これについては後述することにする。さて、かかる再評価の第一の対象として挙げられているのが、「大都市」とそこに生きる人間の「瞬間への忘我」と「労働」である。大都市は「あらゆる意欲の源泉」であり、都会人の瞬間的刹那的なものへの自己忘却も、それが「直接に永遠なるものに触れている」がために、そして「非人格的な力による自己拘束を自明のことと感ずる感覚麻痺」を除去する光であるがために、一概に否定してよいわけではない。さらに労働も単に運命としてではなく、「独自の自己意識と活動的な生活の

喜びの基礎」として認識し直す用意がなくてはならない。(14) これらの中にノールは、青年たちにおける自由で活発な、そして現実を生きるに値するものとして、積極的に受容する新しい生活感情の高まりを期待している。

青年指導は、このように現実的なものの再評価による受容を前提としてかからねばならないのであるが、しかしそれは同時に、青年による現実の無原則な受容を許すものではない。現実的なものの受容は、同時に青年の中に、それに見合うだけの思想・行動の枠のない規範がなければ、単なる放縦に流れる危険性を持つ。ノールにおいてはこの問題は、新しい生活にふさわしい「精神的形式」を青年の中にいかにして創り出すかの問題として論じられている。ただしこれは、そこで次のようにことわっている。「青年の現実への転回は、古い価値を決して放棄しようとするものではなく、それを被包(Abkapselung)から取り出そうとすることなのである。」(15) 価値の覆いを取り除くこと、これをかれは「世俗化」(säkularisierende) とよんでいる。ところでかれは、青年に最高の精神の形式を与えるべき価値の代表として一九世紀最初の三十年間の古典的人文主義を挙げ、これを二十世紀の二〇年代と比較している。

ドイツ古典主義(いわゆるドイツ運動——後述)の時代においても、価値を被包から現実の中に解放しようとする試みはあった。理想から現実への転回は、神の欲する境界へ還ることとされ、宗教

的形而上学的意義を持っていた。しかし当時は、理想から現実への転回は幻想にすぎないとする反動性が優勢であったため、ドイツ運動の最高の形式は転回というよりは俗物化という結果に終わってしまった。現代の状況は一九世紀最初の三〇年間と類似している。どうすればその誤まった道を選べることができるか。その行き方としてノールは二つの例を挙げている。

第一には美的な価値を覆いから取り出し現実や日常生活を「理想化」すること、すなわち美的価値の「世俗化」が考えられる。端的に言えば、青年が美しいものを十分に享受し、それを規範として現実を作り変えていく、といった意味である。しかしそれだけでは、古典的人文主義の陶冶理想と何ら変わるところはないと言ってしまう。そこでかれは次のように言っている。「古い芸術やその享受への垂流的な崇拜、牧歌的な小景への崇拜から現代芸術とその新しい対象に対する没頭への転回が必要なのである。」(16) すなわち、前の世代の小市民的牧歌的美の垂流的享受では何の役にも立たないということである。美的価値の素材と形式を厳しい現実の中に模索している現代芸術の創造の苦しみ、これこそ現代青年が学ばねばならないことなのだ。ノールが芸術を例に引いて青年に期待した意図はここにあると言えよう。したがってその場合、古典芸術と現代芸術と現実そのものとどれがより美的価値を有しているかなどということは、問題にすべきではない。「われわれが自分の運命に責任を持って生き

たいということ、そして創造というものはすべて常にこのような生活や苦悩に対峙してのみ発展し得る」ということこそ忘れてはならないことなのである。結局、「美的存在を被包から解き放ち、日常生活や現実を理想化するのを助けてやること」これが青年指導の課題なのである。(17)

第二に、婦人の社会的活動による「母性の世俗化」が挙げられる。母性の持つ精神的な力の家庭からの解放は、今や婦人の社会的な存在の全範囲にまで及び、新しいタイプの婦人を創造しつつある。婦人運動は現代の危機の根源を、文化や社会の中で婦人の母性が正当な扱いを受けていないため青少年に「精神的母性」が欠如していることにあると見ていた。したがって母性の持つ精神的エネルギーを「固有の閉ざされた生活空間」から解放し、それを現実変革のエネルギーとして利用すること、これも青少年福祉活動の一翼を担う青年指導の課題である。

### 3. 青年の生活学

さて、青年指導員は具体的にはどうすればよいのか。ノールは次のような指針を示している。

第一に青年とできる限り密接な接触を図ることが大切である。それによって青年を十分に理解することができる。ところがノールによれば、「人は教育者として、いつでもある程度、自分の経験に安住してしまふ危険性を持っている」から、青年を自分が青年の時の経

験で評価してしまいがちである。(18) 青年指導員が関係している青年が、いつでも異なる青年であり、絶えず変わりつつある青年であり、「青年の生活形式や青年が抱く目標について自分がかつて獲得したシエマでは活動を推進できない」のだからということをおぼろげに忘れない。(19) だから自分の経験にのみ安住し、特定の生活形式だけを絶対視し他は拒否することは、青年との律動的な関係を失ってしまう危険性があり避けねばならない。実はこのことは、青年指導員が拠り所としている青年についての学、青年心理学の妥当性の問題にもつながっている。これが「決め手」となる普遍妥当な青年心理学は無い。なぜなら青年の具体的な形式というものは全く歴史的なものだからである。

第二の要件は、上で述べた青年心理学批判との関連で取り上げられている。青年心理学ないし成熟期の心理学への批判は次の二点に絞られる。第一の批判点は、青年の生活や行動の形式は完全に歴史的なものであるから、青年心理学が青年を理解するための決め手を僭称することはできないということである。第二に、青年を理解するために、青年の行動の諸相からその現実性を剥ぎ取り、個々の事実の持つ意味を不当に矮小化してしまう「心理学的狭窄」を敢てする青年心理学では不適當である。そこでノールは、青年指導員に「青年の生活学」(Lebenskunde der Jugend)の構想を提供している。それはかれの主著の一つ「教育的人間学——性格と運命

一九二八年」の中で述べられている教育心理学批判と、それに代わるべき「教育的人間学」(Pädagogische Menschenkunde)の構想と同じ系譜に属している。いわゆる科学的心理学が、人間精神のメカニズムの解明者を僭称することへの不信の産物である本書は、今日の教育的人間学(Pädagogische Anthropologie)の嚆矢とされている。青年の生活学の構造と内容についてノールは述べてはいないので、「教育的人間学」の中の内容を使って簡単に述べてみよう。青年の生活学は第一に、青年のあらゆる現実の様態の解釈と評価にあたって、常に「開かれた態度」(Wertoffenheit)を、言い換えるならば、いつでもその他に多くの判断や解釈があるのかもしれないという態度を指導員に求める。(20)それは青年の生活学の基本的立場であると同時に、青年指導員のそれでもある。しかし開かれた態度とは言っても、たとえば職業相談などに見られるように、青年の安直で気楽な問題解決を肯定し、その片棒を担ぐことでは決してない。いつでも青年の抱えている現実の困難な諸問題に踏み込んでいること、これが青年指導員の第二の要件である。(21)

しかし青年の実際の生活を知ることと関わって青年の生活の学を知らねばならない。そこに生活学の必要性というものが考えられてくるのであるが、端的に言えば、青年の生活や行動の枠組を知らねば解釈や判断もできないということなのである。ノールはその枠組を横軸(現実的な方向)と縦軸(理想的な方向)の二つの方向で

考えている。「教育的人間学」の中では、横軸は「体験世界の構造法則」とか「実存の構造法則」と呼ばれている。それは青年が現実の中に放り出され、現実に応じたり適応したりしていくところの青年と現実との関係についての法則である。しかし青年の生活学は、単に青年の現実的・水平的な方向のみを取扱うのではない。「理想形成」という方向をも同時に含むものでなくてはならない。青年の生活学は単なる適応技術の学ではないからである。(22)「教育的人間学」の中では、このことは次のように述べられている。人間はすべて理想、価値、規範に関係づけられている。なぜなら人間は先験的に「精神の諸々の基本方向」(Geistige Grundrichtungen)を持ち、それぞれの精神の基本方向は、価値を志向し価値を実現せざるを得ない内的衝迫を宿しているからである。(23)ノールはプラトンと同じく心を三つの層、つまり「本能の層」「気概の層」「理性の層」に分けている。そしてエロスであり知識欲である精神の基本方向がこれらの層をいわば垂直に貫いているとする。したがって青年の中に眠っている精神の基本方向を覚醒し、価値実現を図らせること、これはすぐれて青年の生活学の課題であると同時に青年指導員の要件でもある。

「青年の生活学、それはいつでも青年の具体的な状況の全体から出発しなければならぬ。すなわち青年の理想的形成を目指しつつ、かれの人間関係、物質的な欲望、運命や係り合いをかれとともにじ

つくり考え、それらの中に横たわる教育的な可能性を自覚させるために。(24) 青年指導はすでに青年運動が克服した教訓や宗教的な説話の説教という方法は採らない。活発な会話、討論、討議による相互啓発こそ重視されねばならない。それは「曖昧に生きられている現実の存在」に対する厳しい誠実さの溢れた批判的で合理的な意識に支えられねばならない。(25) ここから社会的教育学や成人教育のあり方に対するノールの正しい認識を容易に理解することができよう。

ノールにとって青年の問題は単に社会問題である以上に青年教育の問題であった。前に引用したエルンスト・フィッシャーだけでなく、ラートブルフやクララ・ツェトキンなどがプロレタリア青年運動の中に文化・教育運動としての明確な役割を認識していたのと同じく、かれもまた青年運動を青年の自己教育運動として位置づけていた。しかし青年運動が提示した指導理念と具体的な方策が現実的な効力を失った時、それに代わって青年の自己教育の責任と希望を語るのには、青年に最大の期待をつないだノールにとって、すぐれて青年指導の課題であった。青年の現実の問題は、特にかれの社会的教育学に豊かなモチーフを与えたと行ってよい。

## 二、教育学における世代の關係

「青年と日常生活」に現われた青年が「現実の青年」であり、社会的教育学の領域で取扱われていたのに対し、現実の個々の青年ではなく、青年の抽象的本質を精神科学のカテゴリーで説明し、教育学の問題と交錯させているのが「教育学における世代の關係」(Das Verhältnis der Generationen in der Pädagogik, 1914)である。ここでは青年の問題は、世代關係という観点から取上げられており、特に世代關係の歴史的展開の中で出現した現代の「青年教育学」(Jugendpädagogik)の評価に関して論じられている。

### 1. 典型的対立としての世代の対立

この論文は、青年運動に参加したイエナのゼラ協会の青年(主として学生)たちが将来教職を志望しつつも、年老いたラインの教えるヘルバルト派教育学の「榮養のないパン」にあきあきしていることを知って始めて教育学の文献を精読し、教育学を歴史的に概観して著わしたものである。(26) そこにはすでにノール教育学の重要な方法である「歴史的方法」と「体系的方法」の二つが見られることを指摘しておきたい。

ノールはその始めの所で次のように言っている。「教育学におけるすべての歴史的、あるいは超歴史的な対立の背後に常に究極的、教育学的、根源的な対立がある。それは教育的關係それ自体における

全ての陶冶理想から独立しているが故に、独自の教育学の矛盾と呼べられ得る。世代の関係、すなわち父と子の、教師と生徒との関係である。」(27) すべての陶冶理想から完全に独立した「独自の教育学的矛盾」は「その核心があらゆる民族、あらゆる時代に同一であり、常に妥当するものである」限り、これをノールは「典型的な対立」と呼んでいる。(28) しかもかかる対立は、人間の生の基本構造に根ざしていると考えている。

世代の対立は、まさしくこの「典型的な対立」の主たるものの一つに数えられる。それぞれの世代はそれぞれの教育学を組織するから、世代の対立は同時に教育学の対立をも生み出す。言い換えれば、教育学の歴史は、この世代関係の展開そのものであると言っても差支えない。しかし何故にノールは、世代の対立を典型的な対立と見なしたのであろうか。あるいは何故に「世代」とか「世代関係」というものをそれ程までに重大視したのであろうか。一つには、かれが青年運動の黎明期にイエナで実際に世代の力関係の逆転に立ち合ったこと、そしてそこで若い世代の力の躍動に強く印象づけられていたことが考えられる。もちろん世代というカテゴリーに他の諸々の社会的なカテゴリー(例えば「階級」など)を解消し得るのかどうかという問題は、かれの青年運動観の全体的な評価と関わらせて問題にすべきであろう。これについては三で論述したい。さて第二の理由は、第一のそれと関わっているのであるが、精神科学の基本的

なカテゴリーである「体験と表現」受容と創造「支配と従属」で、端的に言えば「生」の二様態である「静止と運動」(vita contentiva u. vita activa)というカテゴリーで世代関係をとらえているため、世代とか世代関係がノールにとって非常に大きな意味を持っていたということである。そして実際、世代関係を認識のカテゴリーとして教育学史を展望すると、教育学史は世代関係を一つの重要な軸として展開しているとノールは言うのである。

## 2. 青年の教育学

ノールによれば、本来存在した教育学は親の教育学と教師の教育学であった。教育目的を掲げるのは常に親と教師であり、教育目的を貫徹するためには規律と罰という強制手段が使われていた。これに対して啓蒙主義、ルソー、シュトルム・ウント・ドラングの系譜で、子どもの固有の権利の承認の上に立った子どもの教育学が組織され始める。子どもは将来への準備の時期ではなく、子どもの固有の世界が教育目的となり、子どもの自己活動が教育の手段となった。子どもの教育学の強調は親や教師の教育学の意味と価値を奪ってしまった。しかし子どもの現実には未知の将来のために犠牲にされてはならないとのルソーの主張にもかかわらず、子どもを将来の生活のために陶冶するという課題を放棄することはできなかった。ノールはそこに将来の目的と子どもの現在の幸福とを同時に満たすという「二重の課題」が生じたと見る。そしてかれは、この課題を解決し

たヘルバルトを高く評価する。かれによる「管理」と「教育」の分離は、そのまま教師の教育学と生徒の教育学の分離に対応している。まさしくかれは、教師の教育学と生徒の教育学の目的と意義を「管理」と「教育」という教育活動に必須な二つの領域として位置づけただのである。

フィヒテやドイツ理想主義によって高揚された理想主義的陶治論の核心は、自立的な精神の王国を絶対視し、それを経験的個人の到達目標としたことにあるが、そのためには子どもや青年を利己心の支配する現実の諸関係から切り離さねばならなかった。しかも旧世代が墮落し創造力を失えば失うほど、この課題は切実なものとなる。その意味で世代関係に深い亀裂をもたらしたのはフィヒテであり、おとなの世代は軽侮の念をもって格下げされた。世代関係に逆転が生じ、今や青年はおとなの世代に代り文化の創造者としての地位と運命の支配者としての地位を自分の手に握った。青年運動の高揚期にそこに参加した青年たちの多くを支配していたのはこの意識である。ここに新たに青年教育学 (Jugendpädagogik) が出現する。旧い世代は教育から排除され、青年は自らの権利と責任で自己教育を組織する。

### 3. 青年教育学の限界

青年運動における青年教育学の主張に対し、ノールはそれを当然の権利として認めながらも、また一方で「その一面的な強調のうち

にひそむ決定的な生の価値を見失う危険性」をも指摘する。(29)

青年に対して絶対的な価値を付与することは青年の本質の誤解である。青年は純粹で繊細で美しいという通念に対して、ノールは「それらはそのうちに何ら精神的基盤を持たず、また持続しない」と指摘し、美化された仮象的な青年の本質を「父性的なものの欠如」にあると見る。その点で青年運動や青年教育学は本質的に「精神的母性」の要求であった。青年運動が目指した新しい青年文化の創造は、世代関係の逆転の中で生の最も深い動因を棄て去ってしまった。それは「権威」と「服従」の軽視である。権威と服従は支配と従属とは異なる。権威というものは、教師や父親が若い世代を「あるべき姿において愛する」ことを前提に、かれらの前に客観的価値の体現者として立ち現われるところに生ずるものである。また服従とはかかる権威の存在を前提とした「自己の意志の中への成人の意志の自由な受容と、成熟し自立する時までの内面的な服従」を意味する。この中で「畏敬や尊敬、敬虔や感謝」といった深い感情、すなわち「道徳性の最も重要な部分」が育まれる。(30) 青年運動のみならず一般にドイツ教育改革運動はそのあらゆる分野において、文化危機打開の道を「共同体」(Gemeinschaft)の再編に求めたが、ノールにおいても権威と服従は、最善の陶治形式とされた「教育共同体」を支える精神的基盤であった。ノールはかかる権威と服従の関係を基軸とする教育共同体における青年の自己教育の本質をヘーゲルに

做つて「他者において自己に至ること」(In den Anderen zu Sich Kommen) と言ひ表わしている。なぜなら青年であることの本質は「受容性」にあるからである。結局青年運動の限界は、共同体の中から古い世代を排除し、それによって權威と服従という共同体の精神的基盤を喪失したことがあるが、それは同時に青年教育学の限界でもあった、とノールは考へている。

ノール教育学と青年運動との関係の深さは改めて述べるまでもないが、しかし同時にかれが青年運動の限界をどのように認識していたかは、かれ自身の教育学の理論的發展の方向性にも関わる問題である。ノールにおいては青年運動およびそれが生み出した青年教育学の限界は、主としてそれが本来あるべき世代関係を解体してしまつたことに理由づけられているが果してどうか。というのは一般にブルジョア青年運動の青年運動たる所以は、世代関係の逆転にこそあるのではなかつたか。従つてその限界を世代の力関係の逆転をもつて理由づけるといふことは、青年運動それ自体の存在理由の否定にならざるを得ない。この問題は一つには、先の引用でかれが青年教育学の「一面的な強調の危険性」を指摘していることにも窺われるように、かれが教育学の基本的な構図を「兩極性」(Polarität) という性格を持つ一連の対概念で描いていることと関つてゐるのであるが、ここではこの問題には論及せず指摘しておくに止めた(31)。

むしろ問題とされるべきことは、青年運動の限界を世代と階級というすぐれて現実的な関係との関わりで認識していたかどうかということである。言い換へるなら世代の解体とその階級的な再編をノールがどのように認識していたかという問題である。これをかれの名著「ドイツにおける教育運動とその理論」をもとに検討してみたい。

### 三、世代と階級——ノールの青年運動観

ノールは青年運動を三つの段階に区分している。(32) ここで問題になるのは、一九二三年から三三年までの第三期の青年運動である。シュプランガーはこれを「青年運動の政治化の増大と軍隊化の開始」と特色づけている。(33) 政党への接近、組織の大規模化、政治的対立の激化が青年運動の顕著な傾向となつた。第一期の青年運動は俗物性と偽善の臭いに満ちた市民社会の惰性的安定を嫌悪し、人間存在の細分化と人格の剥奪に抗すべく、ルソーの原始主義に彩られた詩情的な共同体的生活形式を都会を離れた「森」の中に見出そうとした。第二期のそれは、そうした個人主義的傾向を払拭し、現実からの逃避ではなく青年期の理想主義的体験をそのまま現実変革に適用しようとする。第一次大戦によって古い世界がその土台を揺ぶられ、すべての矛盾を曝け出している時、かれら青年を捉えたのは口

シア革命の成功であった。革命の成功は、それを肯定するしないに拘らず、意志さえ持てば現実のすべてを造り変えることが可能であるという確信を植え付けた。したがって青年運動は文化一般の改造、社会への奉仕、民族の将来に対する責任の遂行に立ち向かおうとする。つまり青年運動は、もはや単に何かに反対することだけでは許されず、何かに賛成して味方になることを強いられるに至ったのである。

しかし青年運動が、ひいては青年が、現実を転回した時、そこにはあらゆる分裂が待ち受けていた。ここに第三期の青年運動が開始される。ノールの言う「青年運動の党派化」、ないしシュプランガーの言う「固有ならざる青年運動」の始まりは、批判と警戒を呼び起こしつつも、結果的には青年運動の発展を異常なまでに促した。しかしそのことは逆に、青年運動がその固有の性格を失い、同時に重大な限界に達着したことを意味する、とノールは言う。その理由としてかれが挙げているのは、青年たちが侮蔑し反抗した一九二四年以前の市民社会の情性的安定がもはやどこにもなく、したがって、常におとなの世界への反抗を本質的な特徴とするブルジョア青年運動のイデオロギーは、その反抗すべき対極を失ったと言うか、あるいは明瞭に捉え得ない程の異質で複雑な様相を呈していたということである。(34) 言い換えるなら、青年運動というものが単に新旧世代の力関係だけでは説明できなくなっていたのである。

時代はずでに世代間の闘争から階級闘争への移行の時であり、その意味でも「世代と階級」の問題についての基本的な考察を迫っていた。(35) 青年運動について言えば、ブルジョア青年運動とプロレタリア青年運動の關係の認識の問題であり、この場合は第三の青年運動の評価の問題である。シュプランガーは、プロレタリア青年運動を「固有ならざる青年運動」として位置づけている。「固有の青年運動」が「おとなのあらゆる影響から、一切の権威から、しかも支配的な文化様式全体から完全に自由であろうとし」しかも「青年から自発的に湧き起こる広汎な解放の波」であるのに対し、後者つまり教会や宗派、政党、軍隊、労働組合などの青年運動は、「証明ずみの権威として重んじられている文化内容と青年自身から生まれてきたものとの混合」にすぎないとしている。(36) いわばプロレタリア青年運動を、プロレタリア政党の「青年部運動」と見なしていると言ってよい。これに対してノールは、第三期の青年運動は固有の青年運動とは異質の青年運動を含み、その意味では確かに固有の青年運動の終焉であるかもしれないが、しかしなお青年運動一般として論ずることが可能であると考えている。なぜなら「たしかに青年世代といえども、それは表面的には分裂した様相を呈してはいる。しかし、決定的なことがらにおいては、かれらが若い存在であるという点以上に、一定の内容とりわけ社会的国家的な信念に自己を結合させているという点でつねに近似性を示している」からである。(37)

そこにはシュプランガーのようなプロレタリア青年運動を「固有の青年運動」から完全に排除してしまう認識のしかたは認められない。つまりかれは、プロレタリア青年運動も含めて、青年運動一般として論じているのである。青年運動内部における方向や立脚するアイデアオロギー、運動の社会的基盤などの多様性・分裂性を無視したというより、それに対して比較的樂觀的な期待を抱いていたのである。ここがまたシュプランガーに対するのとは違った意味で、ハッケヴェイツなどによって批判される点でもある。(38) ではどうして青年運動一般として論ずることができたのか。第一の理由としては当然のことながら、いかなる青年運動も青年のエネルギーを推進力とし、それぞれのエネルギーは方向に違いこそあれ、いずれも最終的には「国家的・民族的課題」に収斂すると考えていたこと、第二に、いかなる青年運動も共通して「共同体」(Gemeinschaft) とか「共同体意識」とか「共同体文化」を重視していること、などである。第一の点は、青年運動が党派性を帯びたとは言え、なお青年運動ひいては青年の純粋な真剣さに対するかれの期待ないし幻想の大きさを示している。第二の点については若干の検討を要する。たしかに、「共同体」思想は、青年運動がドイツ教育改革運動に与えた最も重要な内容であり、それはそのまま教育改革運動を貫徹するアイデアオロギーでもあったから、その意味でも最も問題にされねばならない点である。ここではラートブルフの次のような鋭い批判をあげておく

にとどめよう。「共同体文化という思想はまず青年運動の中で発生した——すなわち社会主義とならんで今日の最も強い精神運動の中で。このような青年の峰起は以前の若い世代の反抗運動とは違って自由を求める叫びを意味しない——むしろその反対である。すなわちそれは個人主義の無拘束状態からの離脱であり共同体への帰依、すなわち新しい拘束、習俗・様式・文化・明党関係・指導および服従といった拘束への憧憬なのである。だが共同体といっても、それがある共同のことがら、ある共同の戦い、ある共同の仕事の共同体でなければ単なる共同体の夢想にとどまる。だからこそブルジョア青年運動は内容を欠くために、その固有の本質について無駄な議論をたたかわすほかなかったのである。」(39) この指摘に見られる「共同体」の内実についての問題意識は、教育改革運動の指導者たちにはなかつたとはいえないまでも、少なくとも強くはなかつた。前述のようにシュプランガーにあっては、青年運動の純粋性をもつばら「権威からの自由」にもとめ、政党の「証明ずみの権威」に依拠するプロレタリア青年運動は固有の青年運動の埒外に置かれた。そこには青年運動における共同体思想の実体についての認識はない。ノールの場合には、「共同体」という形式上の類似性に注目してはいるものの、シュプランガーと同様その内実についての十分な認識は無いといつてよい。また無かつたからこそ、かれは青年運動一般として論ずることができたのである。またある意味では「国家的、民族的課題」

が諸々の青年運動におけるそれぞれの共同体思想の結節点であると考えたからこそ青年運動一般として論ずることができたのであろう。ではなぜそうであったのか。

それはノールが、宗派・党派など現実の権威や勢力が青年運動に注目し、独自の青年組織を作ったという事実を、宗派・党派に対するブルジョア青年運動の一定の影響力の結果としてとらえていることに基づいている。それが青年運動の政治化という状況に対するかれの一種の樂觀的見解——決して樂觀していたわけではないが——を生みだしていたと言えよう。そのことは「青年の獲得競争をしてきた政治的・宗教的なあらゆる党派組織が、しだいに青年運動の諸形式を活用することを強いられるようになった」という言に端的にあらわれている。(40) それはまた、この最初の引用で「世代の関係」あるいは「世代の対立」を「普遍的現象」ととらえていることから明らかのように、本来「集団としての機能の乏しい世代」の方に重点を置き、「階級対立」の問題を「世代」の問題に解消できると考えていたことを示している。

#### 四、結 び

ノールにとって青年・世代の問題はすぐれて青年教育の問題であった。もともとノールの教育学は教育改革運動の評価と不可分の関

係にある。かれによれば教育運動は世紀の転換期における文化危機観に由来する。工業化は規格的な物質文明と都市化をもたらし、共同体(ゲマインシャフト)が解体して形式合理的なゲゼルシャフトに再編されていくことをもって文化危機ととらえる。とりわけゲゼルシャフトへの変質の現実態である都市化をもって大衆化及び生産過程の非人格化の原因とする。ノールにおいては、ハッケヴィッツの指摘するように、文化危機観のイデオロギー的内実は大衆の出現つまりその意識に迫り来る労働階級に対する不安の念に露呈される。そこから教養ある市民階級と青年が必然的に文化危機観の担い手となる。かかる文化危機打開の道を教育改革運動はそのあらゆる分野において共同体の再編に求める。そこにおいて大衆を人格化し、共同体への帰属意識によって民衆を公民へと教化しようと試みたのである。(41) そしてブルジョア青年運動はその運動の尖兵であった。なぜなら共同体意識は何よりも先ずブルジョア青年運動の自己教育運動の中で発生したものであったから、そしてプロレタリア青年運動についても、社会主義の「倫理的な限界」を克服し、かつ「精神化」されるならば、そこにおける「働く者の連帯意識」という主張は、十分にブルジョア青年運動が内包する「共同体意識」に結合し得ると考えていたのである。(42) しかし見方を変えれば、若い世代全体に対するノールの期待がそれだけに如何に大きく、かつ現実生きる青年の教育が如何に重大な問題であったかを察することがで

きるし、ひいては教育改革運動の実際の指導者であったかれの現実的な立場を理解することもできるのである。

註及び参考文献

(1) H. Nohl : Jugend und Alltag (1927), in : Pädagogik aus dreissig Jahren, 1949, S.

98.

(2) 小川利夫「社会的成熟の諸相と教育」『教育学全集11』小学館 1968, 270頁

(3) H. Nohl : a. a. O., s. 99.

(4) H. Nohl : a. a. O., s. 99.

(5) H. Nohl : a. a. O., s. 99.

(6) H. Nohl : a. a. O., s. 99/100.

(7) H. Nohl : a. a. O., s. 100.

(8) H. Nohl : a. a. O., s. 101.

(9) H. Nohl : a. a. O., s. 101.

(10) H. Nohl : a. a. O., s. 102.

(11) ヘルンスタ・フイッシャー著 佐々木・好村訳「若く世代

の問題」1966, 69頁

(12) H. Nohl : a. a. O., s. 104.

(13) H. Nohl : a. a. O., s. 104.

(14) H. Nohl : a. a. O., s. 105.

(15) H. Nohl : a. a. O., s. 105.

(16) H. Nohl : a. a. O., s. 106.

(17) H. Nohl : a. a. O., s. 106.

(18) H. Nohl : a. a. O., s. 108.

(19) H. Nohl : a. a. O., s. 108.

(20) H. Nohl : a. a. O., s. 107.

(21) H. Nohl : a. a. O., s. 109.

(22) H. Nohl : a. a. O., s. 109.

(23) 拙稿 「ノールの教育的人間学」教育方法談話会編『教育方法学研究』第二集(1967, 80頁以下参照。

Volkshochschule, 25Jg. 1929/30, S.

(24) H. Nohl : a. a. O., s. 109.

(25) H. Nohl : a. a. O., s. 109.

(26) H. Weinel : H. Nohl u. die Anfänge der Thüringer Volkshochschule, in : Die

Volkshochschule, 25Jg. 1929/30, S.

515.

(27) H. Nohl : Das Verhältnis der Generationen in der

Pädagogik (1914), in : Pädagogische

Aufsätze, (2 Aufl.) 1929, S. 111

(28) H. Nohl : Die pädagogische Gegensätze (1914), in

(28) H. Nohl : Die pädagogische Gegensätze (1914), in

- ; Pädagogische Aufsätze, (2 Aufl.) 1929, S. 101.
- (29) H. Nohl; Das Verhältnis der Generationen in der Pädagogik, in; a. a. O., S. 118
- (30) H. Nohl; a. a. O., S. 119/120.
- (31) 拙稿 「ホルピン・ノールの社会的教育学の方法論(一)」水戸短期大学紀要『水戸論叢』第7号、1972、119頁以下参照。また拙稿「ノールとシュンプランガーの教育学における主観と客観の関係」『茨城大学教育学部紀要』第14号、1974、101頁以下参照。
- (32) H. Nohl; Die pädagogische Bewegung in Deutschland u. ihre Theorie, (5 Aufl.)1961, S. 12 ff.
- (33) E. Spranger; Fünf Jugendgenerationen 1900—1949, in; Pädagogische Perspektiven. (7 Aufl.) 1962, S. 38.
- (34) H. Nohl; a. a. O., S. 22.
- (35) カール・トントンの有名な「世代の問題」(Das Problem der Generation, 1928)はその最初の試みである。
- (36) E. Spranger; a. a. O., S. 29/30.
- (37) H. Nohl; a. a. O., S. 22.
- (38) W. von Hackewitz; Das Gesellschaftskonzept in der "Pädagogischen Bewegung", 1966, S. 50ff.
- (39) ライトブルフ著 野田・山田訳「社会主義の文化論」『ライトブルフ著作集八』1961、33頁
- (40) H. Nohl; a. a. O., S. 19.
- (41) W. von Hackewitz; a. a. O., S. 54ff.
- (42) このことは、かれの「青少年福祉活動の精神的エネルギー」(1926)の中に明瞭に表現されている。拙稿「ノールの社会的教育学の方法論(一)」注(31)の上掲書所収、136頁以下参照。